

第9回INAS世界知的障害者陸上競技選手権大会の 状況からみる国内外情勢

A study for affairs at home and abroad in the future
from 9th INAS Word Athletics Championships.

井 上 明 浩
Akihiro INOUE

〈要旨〉

2013年第9回INAS世界知的障害者陸上競技選手権大会が世界22カ国から230人の選手団が参加し、中東欧チェコの首都プラハで開催された。この大会に日本選手団が参加したことは、今回で6回目となるが、過去最高の成績を残した。知的障害者スポーツの全国的な展開の幕開けは、1980年の日本スペシャルオリンピック委員会設立であり、その後1999年に日本知的障害者陸上競技連盟（JAAID）が設立され、徐々に発展してきた。しかし今後、さらなる競技力向上が課題となろう。そのためには一般競技団体との統合化を図ることが必要となろう。障害者スポーツという捉え方より、アダプテッド・スポーツ・アクティビティーとして、障害者のみならず幼児、高齢者、女性等々何かしら配慮を必要とする人を対象としたスポーツとして統合的に実践され、地域スポーツとして発展していくことを願う。

〈キーワード〉

知的障害者、世界陸上競技選手権、アダプテッドスポーツ

1. はじめに

2013年6月9日から16日の日程で第9回INAS（International Federation for sport for para-athletes with an intellectual disability）世界知的障害者陸上競技選手権大会がチェコの首都プラハで開催された。この大会の参加にあたっては、日本パラリンピック委員会⁽¹⁾（JPC：Japan Paralympic Committee）が窓口となり、日本知的障害者陸上競技連盟（JIDAF：Japan Intellectual Disability Athletics Federation）が選手の選考及び派遣を行った。まず選考にあたっては、JIDAFが現在国際大会派遣対象選手として日本選抜チームを編成しており、その選手の中から今大会参加標準記録を上まわる者を対象として、選手本人並びにその選手の指導者そして保護者に出場の意向を尋ねた。今大会は、選手27名役員11名、日本選手団計38名で編成された。今大会は、世界22カ国から230人が参加。地元の中・高校生等約100人を超すボランティアに支えられ開催された。筆者は個人的に80年代後半から約25年以上に亘ってボランティアコーチとして知的障害者スポーツに関する活動に携わっている。この間国際パラリンピック委員会（IPC：International Paralympic Committee）が関与する競技ス

ポーツの国際大会には、1992年マドリッドパラリンピック（スペイン・マドリッド）を皮切りに、コーチや監督、団長として数多くの国際大会を経験してきた。

今大会で9回を数える世界知的障害者陸上競技選手権大会であるが、これまで日本は過去1999年スペインのセビリャで開催された第2回大会から出場している。この度、私自身日本選手団副団長として参加の機会を得たので、その状況を報告したい。



第9回INAS世界陸上競技選手権大会開会式

パラリンピックは国内外での知名度はかなりあり、その名を聞いたことがない人はいないくらいであろうが、障害者スポーツにおいても、健常者スポーツ同様に各競技別に世界選手権大会が毎年世界中のどこかで盛んに行われている。しかしそれらはパラリンピックに比べると、国内ではまだまだその知名度や認識は薄いと言える。ましてや知的障害者の陸上競技の世界選手権大会などの情報さえ関係者周辺内で終始してしまう状況であろう。一方、今年8月に開催される予定の日本ID (athletes with an intellectual disability: 知的障害者) 陸上競技選手権大会は今回で18回を数え、高い標準記録が設定されているにもかかわらず、過去最多の200名を超える選手が出場を予定しおり、競技力の高い見ごたえのある試合が今年度も繰り広げられそうである。JIDAFが設立され今年で14年を迎え、知的障害者スポーツにおける競技性の高い陸上競技が国内に浸透しつつある。今後その活動がどのように普及、発展していくか、現時点で展望したい。

2. INAS (International Federation for sport for para-athletes with an intellectual disability) アイナスの概観と国内外情勢

2-1 国際組織とその理念

知的障害者スポーツ界の国際的競技スポーツをリードしてきたINASは、1986年に設立された。設立から約30年近く経過したが、会長や事務局が次々と変わり組織的には安定しているとは言いがたく、現在の事務局は英国内で知的障害者の支援団体として長い歴史を有するMENCAP⁽²⁾に置かれている。MENCAPはマンチェスターから北東に約40kmのウィークフィールドに事務局を構えている。おそらくロンドンパラリンピックを見据えてのことであっただろうが、シドニーパラリンピック以来、知的障害者はパラリンピックに参加できない状況が続いていた。1996年アトランタ大会で初めて知的障害者が参加し、1998年長野、2000年シドニー大会までの3大会に参加に参加したが、シドニー大会での男子バスケットボール競技で金メダルを獲得したスペインチーム15名中、健常者が11名いたことが発覚し、その後IPCの裁定としてIDクラス(知的障害者部門)選手の選手登録制度の再構築がなされるまで、パラリンピックへの道が閉ざされた。その間、つまりパラリンピックに知的障害者が出場できない期間、その代替えの大会として当時のINAS-FIDが主催し4年に一度グローバルゲームを開催している。しかし最近になって、ようやくその問題が解決され、ロンドンパラリンピックからIDクラス競技つまり知的障害者が出場できる競技が復活することとなった。その陰にはMENCAPの果たした役割がかなり多かったことは優に想像できる。

INASの理念は、ノーマライゼーションの理念がその基礎にある。これは知的障害のある人も社会の一員として同じ権利・機会・義務をもつということを意味する。彼らは、高齢者や幼児、目や耳が不自由な人、身体に障害のある人達同様に何らかの支援を必要としているのである。スポーツの場面においても、知的障害のある人は、自分の能力レベルに合わせて、地域・国・国際大会に、進んで参加する権利を有している、ということを掲げている。⁽³⁾

現在のINAS加盟国

ヨーロッパリジョナル

オーストリア、ベルギー、クロアチア、チェコ、デンマーク、エストニア、フェロー諸島、フィンランド、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、ハンガリー、アイスランド、イタリア、ノルウェー、ポーランド、ポルトガル、ロシア、スロバキア、スペイン、スウェーデン、オランダ、トルコ、ウクライナ

25カ国

アメリカリジョナル

ブラジル、カナダ、コロンビア、エクアドル、メキシコ、プエルトリコ、アメリカ、ベネゼイラ、ニカラグア、ガテマラ、アルゼンチン

11カ国

アジアリジョナル

台湾、香港、日本、マカオ、マレーシア、シンガポール、韓国、タイ、アラブ首長国連邦、インド、イラン

11カ国

アフリカリジョナル

カーボベルデ、モーリシャス、南アフリカ、エジプト、チュニジア、カメルーン

6カ国

オセアニアリジョナル

オーストラリア

1カ国

計54カ国

2-2 日本国内での知的障害者スポーツにおける競技スポーツとJIDAF

我が国における知的障害者スポーツの競技スポーツの幕開けは、日本スペシャルオリンピック委員会(Japan Special Olympics Committee: JSOC)が1980年4月に発足したことに始まると言っていいだろう。翌1981年10月第1回日本スペシャルオリンピック全国大会(神奈川県藤沢市体育センター)が開催された。その後同大会は、日本スペシャルオリンピック東京地区委員会、社団法人東京都精神薄弱者スポーツ協会及び日本精神薄弱者スポーツ振興協議会が共催という形で、精神薄弱者スポーツ全国大会兼スベ

シャルオリンピック全国大会という並列名称で行われた。そして1991年に第7回大会を同様の名称で大阪にて開催し、この大会を持って同大会は幕を閉じた。その後(社)東京都精神薄弱スポーツ協会や社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会の後押しがあり、1992年11月21日、22日の2日間、それまで東京で開催した時と同じ場所の駒沢オリンピック公園陸上競技場を中心会場に第1回全国精神薄弱者スポーツ大会ゆうあいピック東京大会が開催された。開会式では大会史上初めて皇太子殿下が臨席し、全国すべての都道府県・政令指定都市から約3000人の選手が参加して、陸上競技、水泳、フライングディスク、卓球、ボウリング、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール合わせて9競技に熱戦が繰り広げられた。その後法令用語の改正に伴い、全国知的障害者スポーツ大会ゆうあいピックに改称され、次第に競技性が高まり、2000年の第9回大会ゆうあいピック岐阜大会まで開催された。その後、ゆうあいピックは2001年から開催された全国障害者スポーツ大会に統合され、発展的に解消した。21世紀の幕開けとともにこれまで国民体育大会の直後に開催されていた全国身体障害者スポーツ大会は、「身体」という文言を外して、ゆうあいピックを統合し、全国障害者スポーツ大会として新たな段階を迎えた。この大会は、厚生省（当時）並びに(財)日本障害者スポーツ協会、開催地都道府県の三者が主催する文字通り行政主導の大会である。⁽⁴⁾

一方、民間主導では神奈川県横浜市中区に本部を置くPWLがFMHジャパンチャンピオンシップ大会⁽⁵⁾を1996年から開催していた。PWLとは「PLAY WORK LEARN」の略で、スポーツなど様々な活動を通して障害者の交流拡大、健康アップを進めていた。単なるレクリエーションではなく、日ごろの練習成果と記録を競い合う場を、という障害者からの希望にこたえ、この大会を企画した。⁽⁵⁾現在PWLはNPO法人として、主に知的障害者と精神障害者のためのグループホーム経営をしている。第1回大会を迎えた1996年は、3月にスキー、4月にバスケットボール、8月に水泳、9月に陸上競技を開催した。陸上競技は、日本体育大学建志台陸上競技場に全国12都道府県及び政令指定都市から77名の選手が参加して行われた。スペシャルオリックスやその流れを汲む、ゆうあいピックそして現在の全国障害者スポーツ大会は、最大8人で決勝のみが行われている競技運営であるが、この大会は通常の陸上競技大会同様に予選、準決勝、決勝が行われ、つまりチャンピオンが決定される大会であった。この大会が知的障害者スポーツ史上初めての本格的競技スポーツの幕開けとなったと言っても過言ではない。FMHジャパンチャンピオンシップ陸上競技大会は、第3回大会まで継続され、それを引き継いだのが現在のJIDAFである。JIDAFは1999年に設立し、

橋本聖子会長（文部科学副大臣歴任）を擁して、政財界からの支援を集め組織を固めていった。日本知的障害者スポーツ連盟よりも設立は古く、その組織編成や国際大会への日本代表選手派遣を兼ねた日本選手権大会の開催などその先駆的な取り組みは、他の競技団体の手本ともなった。今年で18回を迎えた日本ID陸上競技選手権大会は、年々各選手の競技力を向上させ、さらにこれまで知的障害者には危険かつ難しいと思われていた投擲競技も普及し、知的障害者ための陸上競技全般の振興発展に大きく貢献している。

3. INAS 世界知的障害者陸上競技選手権大会概要及び第9回大会の参加状況

3-1 大会沿革と日本選手団

今大会で9回を数えるINAS陸上競技選手権大会であるが、現組織がINAS-FMHとして設立した1986年の直後から開催されており、INASが主催する数競技の中で水泳と並んで最も早い段階から世界選手権大会を開催している。詳細は以下のとおりである。

過去大会の開催年及び場所

第1回大会	1989年	HARNOSAND	スウェーデン
第2回大会	1999年	SEVILLA	スペイン
第3回大会	2001年	TUNIS	チュニジア
第4回大会	2003年	TUNIS	チュニジア
第5回大会	2005年	CANBERRA	オーストラリア
第6回大会	2007年	FORTALEZA	ブラジル
第7回大会	2009年	LIBEREC	チェコ
第8回大会	2011年	LIGURIA	イタリア

日本は、第2回のスペインのセビリア大会から参加した。当時は同地で健常者の世界陸上が開催され、その約1か月後に知的障害者の世界陸上競技選手権大会が開催された。日本選手団は、役員4名選手7名が参加したが、そのうち金沢から2名の選手が代表入りし、その一人が1500mで日本選手として世界知的障害者陸上競技選手権大会初の銀メダルリストとなった。その後、第3回大会は不参加となったが、第4回大会以降は、毎回選手を派遣している。

3-2 第9回INAS世界知的障害者陸上競技選手権大会概要

第9回大会は、2013年6月9日（日）から16日（日）世界の22の国から230人が参加し、第7回と同じ開催国、チェコのプラハで開催された。プラハはスチエコの首都であり、同国最大の都市である。中央ヨーロッパ有数の世界都市でもある。人口は、約120万人。世界遺産や古い町並み・

建物が数多く現存しており、毎年海外から多くの観光客が訪れる。⁽⁶⁾

現地を訪れてまず感心したことがある。それは選手村に指定されたホテルである。健常者のヨーロッパオープン陸上競技選手権大会が同時期にプラハ市内の別の競技場で開催されていたのであるが、その出場選手達と全く同じホテルが選手村として充てられたことである。その大会に出場している多くの選手はオリンピックレベルの所謂一流の選手達である。ロビーには、各々の専用デスクが置かれており、大会に関する様々な情報やサポートがそこでは受けられる。ホテル内ではロビーをはじめ、レストランやバー、廊下や玄関、庭などいたるところで双方の選手や役員が顔を合わせる。つまり、陸上競技の世界レベルの選手達は、障害の有る無しで全く区別されていないということを物語っている。現在の日本では、健常者と障害者の世界レベルの大会が、もし同じ都市で開催された場合、選手村は分けて設営されるのではないだろうか。まだまだ障害者スポーツと一般スポーツの間には見えない壁が存在しているように思われる。



選手村に指定されたオレアホテルピラミディア（プラハ）

まず、大会会場や移動に関して述べる。会場はプラハ城にほど近い丘にあるストラホフスタジアムであり、この場所はホテルから歩いて行けるところにある。これまでの大会のほとんどは、選手村から競技場への移動はシャトルバスであったが、今回は徒歩での移動が可能であり、しかも市内中心部に位置しており、非常に利便性が高い位置関係であった。そしてメイン競技場から補助競技場のアクセスも至近距離であるが、どちらの陸上競技場も老朽化していることは否めない。次に人員体制であるが、競技役員が数多くいたという印象は受けなかったが、最終日の1600mリレーでの結果が、抗議により覆ったこと以外には大きな問題もなく、ほぼ予定通りに競技会が運営された。また式典関係では、開会式では、地元中・高校生のボランティアの配置もあり、入場行進や式典内容の振興は円滑に執り行われた。閉会式は、選手村ホテルのバンケットホールで行われた。まず、INAS代表者及び主催者並びに運営主体団体代表者らの挨拶、そして最優秀選手賞や国別対抗戦の表彰式が行われた。日本は知的障害者陸上競技史上初の団体3

位を男女同時に獲得する快挙を成し遂げた。そして表彰式後、地元プラハのミュージシャンが選手の活躍を讃え、会場内を盛り上げた。

国別対抗戦
男子・女子共に3位



次に大会の内容であるが、選手団は6月8日(土)に成田を出国、ドバイ経由で翌日曜日現地入りし、9日(日)はアクレディション⁽⁷⁾並びに練習日、10日(月)監督会議、12日(火)は開会式その後競技会、そして15日(土)競技会、競技会終了後夜閉会式、16日(日)は選手団退村現地出国、翌6月17日(月)帰国という日程であった。5日間の競技日程の中で、100m、200m、400m、800m、1500m、3000m、5000m、10000m、100mH、110mH、400mH、3000mSC、5000m競歩、10000m競歩、棒高跳び、走高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投げ、やり投げ、ハンマー投げ、4×100mR、4×400mR、7種競技の26競技が開催された。何れも出場するためには、数種目のオープン参加が認められている種目を除き、ほとんどの種目において参加標準記録が設定されている。その記録は、おおよそではあるが日本選手権大会入賞レベル以上または優勝の記録と同レベルの参加標準記録が設定されており、文字通り世界ナンバーワンを決定するレベルの高い競技会である。

そして今大会は、男子110mH、棒高跳の種目に世界新記録が誕生した。その一方で日本選手団も過去最も良い成績を収めた。男子5000mと女子のやり投げで1位2位3位を獲得し表彰台を独占した。また男子10000mでは1位3位、同女子5000mでは日本新記録で1位、女子3000mで3位、3000mSCでは日本新記録で3位、さらに4×100mRで男女共に日本新記録で1位、その他入賞多数であり、日本選手男子16名中14名、女子11名中全員が入賞を果たすことができ、その総合点により男女ともに国別対抗戦3位を獲得した。日本知的障害者陸上界は前回大会の第8回大会では男子5000mで初の金メダルを輩出したのであるが、今大会では、それを一挙に上回る好成績を残した。この背景には、ロンドンパラリンピックの翌年ということがあり、数名の有望選手が出場していなかったこと、また各国の派遣選手の中には、次のリオデジャネイロパラリンピックを目指す若手選手を出場させていたことなどが考えられる。しかし

ながら、日本は参加22カ国中最も多い選手団を送り込み、他国同様に若手選手を多く起用し、さらにこれまでエントリーしていなかった種目にもあえて挑戦して、好成績を収めた。



男子4×100mリレー表彰式

4. INAS加盟日本知的障害者陸上競技連盟JIDAF 設立経緯と今後の課題

我が国における知的障害者スポーツの全国的な広がりを展開させた組織は、1980年設立日本スペシャルオリンピック委員会（以下JSOC）である。当時の陸上競技の選手たちは、スペシャルオリンピック全国大会を目指して、日々の練習に励んでいた。それを支える組織としては、JSOC並びに全日本手をつなぐ育成会であり、地方においては各都道府県の手をつなぐ育成会であった。これらの組織は、当然ながら、福祉という立場からスポーツを支えるという意味合いが強い。純粋に陸上競技の発展を目的とする団体ではない。一方、民間主導では、前述した神奈川県横浜市中区に本部を置くPWLがFMHジャパンチャンピオンシップ大会を1996年から開催していた。単なるレクリエーションではなく、日ごろの練習成果と記録を競い合う場をという障害者からの希望にこたえ、この大会を企画した。これまでのスペシャルオリックスやその流れを汲む、ゆうあいピックそして現在の全国障害者スポーツ大会は、各組ごとの決勝のみが行われている競技運営であるが、この大会は通常の陸上競技大会同様に予選、準決勝、決勝が行われた。つまりチャンピオンが決定されるのである。この大会を引き継ぐ形で、知的障害者のための陸上競技を専門に支える団体として1999年に日本知的障害者陸上競技連盟（JAAID）が設立された。そしてJAAID設立以降、日本ID陸上競技選手権大会並びに日本IDフルマラソン選手権大会の開催、日本選手団選考及び編成、派遣、日本選抜選手強化合宿実施等の選手育成等々、格段にそのスポーツ環境が整ったと言える。

しかしながら欧州に比べると、日本のそれはまだ遅れていると言わざるを得ないであろう。障害者スポーツの祭典

その最高峰のパラリンピックに知的障害者が参加できるようになったのは、その起源である1948年ストックマンデビル大会から数え、約50年経過した1996年のアトランタ大会からであり、日本選手団が参加したのは、2000年のシドニー大会からである。一方、我が国においては、1998年の長野パラリンピックを契機として、障害者スポーツが、一般的な競技スポーツ同様に競技性が強調されるようになってきた。そのような潮流が、まずFIDジャパンチャンピオンシップ競技会を誕生させ、それを土台に現在のJIDAFがある。組織の拡充という面で、JIDAFは我が国の知的障害者のスポーツの先駆的で牽引的な役割を果たしてきたと言える。しかし今後、国際的に活躍できる選手を継続的に輩出していくためにはさらなる競技力向上が課題となろう。それには現在のJIDAFの組織では限界がある。根本的な課題として次なるステージは、一般競技団体との統合化であろう。既に国際テニス連盟は、国際車椅子テニス連盟を傘下に抱えている。つまり健常者スポーツと障害者スポーツが統合化されているのである。今のところ陸上競技界ではそのような動きは全くないが、そう遠くない将来にそれが実現することを願う。国内においては、まず日本身体障害者陸上競技連盟と日本知的障害者陸上競技連盟、並びに日本聴覚障害者陸上競技協会、日本盲人マラソン協会が統合し、日本障害者陸上競技連盟を発足させ、その後日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。もしそれが実現されれば、競技会運営役員及びスタッフ、日常練習活動のための指導者不足等、慢性的な人員不足はかなり解決され、知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながることは自明のことであろう。

欧州では、障害者スポーツはすでに特別なものではなくアダプテッド・フィジカル・アクティビティー⁽⁸⁾と呼ばれ、障害者のみならず幼児、高齢者、妊産婦、病虚弱者、また運動が苦手または不得意だと思っている人、肥満を解消したいと思っている人等様々な人を対象としたスポーツとして行われ、地域スポーツとして、あるいは総合型クラブという形態をとり発展している。一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体とも連携し、普及強化、振興発展が普通に行われている。我が国においてもそのようなことが着実に浸透していくことを期待したい。

5. まとめ

本研究をまとめると以下ようになる。

- ・第9回INAS世界陸上では日本チームは好成績
- ・国内では、1980年代から行政主導の福祉の中で発芽、2000年代はより障害者の競技スポーツとして発展
- ・今後は、一般競技団体との統合化、純粋なスポーツ文化として振興を期待

2013年第9回INAS世界知的障害者陸上競技選手権大会が世界22カ国から230人の選手団が参加し、中東欧チェコの首都プラハで開催された。この世界知的障害者陸上競技選手権大会に日本選手団が参加したのは、第2回大会からであり、第3回チュニジア大会の不参加を除き、今大会で6回目となる。日本は参加全体の中で最大の37名の選手団を派遣した。そして過去最高の好成績を残した。

知的障害者スポーツの全国的な展開の幕開けは、1980年の日本スペシャルオリンピック委員会設立である。当時の陸上競技の選手たちは、スペシャルオリンピック全国大会を目指して、日々の練習に励んでいた。それを支える組織としては、JSOC並びに全日本手をつなぐ育成会であり、地方においては各都道府県の手をつなぐ育成会であった。しかしこれらの組織は、本来福祉団体であり、純粋に陸上競技の発展を目的とする団体ではない。1994年に日本知的障害者陸上競技連盟(JAAID)が設立されるまでは、知的障害者のための陸上競技を専門に支える団体はなかったのである。JAAID設立以降、日本ID陸上競技選手権大会並びに日本IDフルマラソン選手権大会の開催、日本選手

団選考及び編成、日本選抜選手強化合宿実施等の選手育成等々、格段にそのスポーツ環境が整ったと言える。

今後、国際的に活躍できる選手を継続的に排出していくためにはさらなる競技力向上が課題となろう。そのためには一般競技団体との統合化を図ることが必要であろう。つまり日本障害者陸上競技連盟をまず発足させ、その後日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。これが実現すれば、飛躍的に知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながるであろう。

欧州では、障害者スポーツという捉え方は、過去のものになりつつあり、現在はアダプテッド・スポーツ・アクティビティと呼ばれ、障害者のみならず幼児、高齢者、女性等々何らかの配慮を擁する人を対象としたスポーツとして統合的に実践され、地域スポーツとして発展している。つまり一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体とも連携し、振興発展がなされている。我が国においても今後そのようなスポーツ環境の整備がなされることを期待したい。

注及び参考文献

- (1) 日本パラリンピック委員会(JPC: Japan Paralympic Committee) 国際パラリンピック委員会(IPC: International Paralympic Committee)に加盟する国内を代表する機関。日本パラリンピック委員会は、財団法人日本障害者スポーツ協会の内部組織として、1999年8月20日厚生省の認可を受け、発足した。
- (2) MENCAPは1946年英国内の知恵遅れの子をもつ親の団体組織を基盤に、学習障害のある人を支援する団体として設立された。世界的に見てもこの取り組みは先駆的である。我が国においては、学習障害の定義は文部科学省が近年ようやくその定義を定めたところである。
- (3) INAS「The INAS Handbook」2010年
- (4) 井上明浩「2009スペシャルオリンピック冬季世界大会の状況と今後の国内展望」金沢星稜大学人間科学研究第3巻第2号2010年
- (5) FMH ジャパンチャンピオンシップ大会は、当時の国際精神薄弱者スポーツ協会INAS-FMH(The International Federation for sport for athletes with an Mental Handicap)と協力関係をもちながら、全日本手をつなぐ育成会松友了常務理事とPWL代表箕輪一美氏が中心となり、通常の日本選手権大会と同様な形式をとる知的障害者スポーツにおける国内初の競技会である。
- (6) Prague CZECH「Welcome to Prague CZECH 2013」
- (7) アクレディテーションは、当該大会のための選手登録証の発給をいう。障害者スポーツのほぼ全ての競技会においては、クラス分けが現地で最終確認として行われている。知的障害者スポーツにおいては、INAS-FID選手登録カード及びパスポートを用いて本人照合の後、アクレディテーションカードが発給され、大会期間中競技会場の出入りなどその効力を発する。
- (8) スポーツに身体を合わせるのではなく、スポーツをその人の身体状況や発達状況に合わせる。障害の有無にとらわれることなく、幼児から高齢者、妊娠婦、体力に自信がない人、スポーツが苦手だと思っている人等、すべての人を対象とした身体活動をさす。